第8号
1979年10月20日発行

木野通信 特集号

京都精華大学
〒606京都市左京区岩倉木野町137の1
電話 京都 (075)791－6131

“信愛”のこころを再び

京都精華短大創立10周年 京都精華大学開学記念祭開催にあたって

学長 深作光貞

在学生およびなつかしい卒業生諸君、さらに御父兄、精華関係者および御厚情をもってわれわれの大学を支援してくださっているみなさん、われわれは来たる十一月三日の〝文化の日〟に、京都精華短期大学創立十周年・京都精華大学開学記念祭を、とりおこなうことにいたしております。

実をいうと、京都精華短期大学は一九六八年の開学ですから、昨年で満十年目。したがって、昨年中に創立十周年記念をするべきでしたが、何しろ創立以来の熱烈な願望であった美術科を四年制へ！という計画を実現すべく総力をあげている時だったため、四年制認可をとることこそ十周年の最大の事業であると考え、今年に延期したわけです。「もし認可がとれなかったら十周年はしないのか」という声も、その時ありました。しかし、絶対成功させる。成功させなければ……と考えていましたので、確信をもって延期したのです。

短大初期の卒業生の中には、かつて〝四推会（四年制推進会）〟の熱心なメンバーだった方々もいます。あの時は諸事情のため君たちの運動に応えることができませんでしたが、それ以来われわれ教職員はたゆまぬ努力と苦心と調査をかさね、政令指定都市という制約のある京都の地に例外的認可をとりつけ、ついに本年ようやく宿願をはたしたのです。これには、地元の方々のまさに感動的御支援があったわけで、この紙面をかりて、心から厚く御礼を申しあげます。ありがとうございました。

このように述べただけで、すでにおわかりのように、短大創立十周年・大学開学の記念祭は、まことに意義ふかいもので、卒業生もこの記念祭の大事な主役です。そればかりではありません。

私がなつかしく想い出すのは創立年の第一回大学祭のことです。当時は、学生総数二百名、教職員総数三〇余名しかいませんでした。そこで他大学の大学祭に負けないよう、学生と教職員が夢中になって働き、ささやかではあるが〝信愛〟の雰囲気にみちあふれたすばらしい木野祭にしました。とくに英語英文科のコーナーが実に見事でした。この学生と教職員の息のあった共同作業が、今日の精華の基礎をつくったのです。

ですから、卒業生はもちろん、精華に貢献され、諸事情で退職された旧教職員の方々も、是非とも記念祭におでましください。お忙がしいでしょうが往時を忘れないで来てください。「忙」という字は〝心ヘン〟に〝亡〟、「忘」という字は〝亡〟と〝心〟で、まったく同じ要素でできた漢字です。忙しすぎると、おそらく大事なものを忘れがちです。その大事なものとは、精華の場合、〝信愛〟であろうと、私は確信します。人間は、愛することで無限の力を発揮します、信じることで苦難を耐え抜きます。精華は、精華を信愛する人びとの力で、今日を築きました。精華の将来も、いかに精華を愛し信じるかに、かかっているでしょう。私は、この記念祭に多数の卒業生や、かつての教職員の方々にも来ていただき、〝信愛〟のこころを確認しあう記念祭にしたいのです。在学生も現在の教職員でも、この〝信愛〟のこころを強く堀りおこすべきだと、思っています。

ともかく、過去をふりかえり大きな未来への志向を固める記念祭の中にあって、精華の今回の記念祭は、精華にとってきわめて重要な歴史的節目を確認する機会です。在学生たちも、張りきっていろいろな企画をしています。

どうぞ、秋ふかい紅葉の洛北の山麓の記念祭が意義のあるものになりますよう、みなさんの御協力をおねがいし、みなさんの御来校をお待ちいたしております。

この十年

岡本清一

人がいつも自分の過去を語ったり、自伝を書いたりするようになると、その人は成長を止めたとみてよろしいが、国家や学校といった集団の場合には事情がちがうようです。集団にも衰えがありますが、それは自然現象ではありません。その社会的条件によるのです。最も重大なその条件は、貴族が生れ、それが永く固定化することです。イギリスの衰退はそこに理由があるようです。もちろん貴族はイギリスだけに存在しているのではなく、多かれ少なかれすべての国にあります。ソ連にも中国にも、巨大な共産党貴族が存在し、またその現象は、政党にも企業にも学校にも、同じように起ります。

われわれの大学では、過去十年をかけて、ほぼ完全に大学貴族の発生の根を切断することに成功しました。ここでは学長も理事長も特別の人ではありませんし、その永続を避ける風が定着しました。それではこれから先、この大学はどう展開するだろうか、それは教職員学生の聡明度にかかることですから、それはわかりません。しかし成長の条件がつくられたことだけは確実です。

では、どう成長すべきか。校地、校舎等の設備は、もちろん整えられるべきです。しかし過去十年の精神の歴史を引きつぐ形でいえば、志を立てることの重大性です。私はいつか、これを象徴的に「世界一の大学」というように申しました。人々はそれを突飛だと思ったのか、みんな笑いました。しかし、文部省の人が、東大を世界一の大学にする、といったとしたら、みんな笑うでしょうか、多分、笑わない、そこに問題があります。

緒方洪庵の適塾は、幕府の「藩書調所」や「開成校」とは、比べものにならないほど貧弱な学校でしたが、歴史的意義は偉大でした。吉田松陰の松下村塾のごとき、いうまでもありません。その偉大さは「志」の偉大さにあります。

われわれの大学は如何なる志をもつべきか。それは大学というような組織体に、独りでに生れるものではなく、この大学の一人一人の者が、自分の志をもつことから、はじめられるべきだと存じます。そして、この大学という組織体が、その志の達成を可能にし、そしてその可能性を高めつつ、さらに一人一人の構成員に反射してその志を高くしていくのです。柳島先生はかつて英語でこれを lofty aim といい、この組織体には、great harmony が高められなければならない、と表現されたことがありました。

この志は、芸術家の場合には、前人未踏の自分の境地を対象に実現することでしょう。学者・思想家にあっては、それまた末到の思想的境地を体系として実現することにあるでしょう。そして経営人にあっては不断に時代と経営にかんする最高の感覚を自己のものとすることにありましょう。その志の現われ方は異っても、窮極的には同じです。そしてそこでは生得の能力の有無と老若の差が問われてはならないでしょう。だからこそ、われわれは一個の集団を、一つの志をもつものとして形成することが可能なのです。われわれは胸中に深く、高い志をいだいて、すすんでいきたいものです。

記念事業計画

京都精華短大創立十周年・京都精華大学開学を記念して左記の事業を計画しております。この事業実行に当っては、本学の教育後援会より多大な援助をいただいております。

一、奨学金ファンドを計画的に確立する（目標一億円）。
一、標本・資料等の充実を計画的に行う。

記念祭日程

記念祭準備委員会

大学祭（木野祭）は例年通り、十月三十一日から十一月四日にかけて行われますが、本年は特に、十一月三日を、京都精華短期大学創立十周年・京都精華大学開学記念祭としていろいろな催しものが行われます。その日程は左記の通りです。

●記念式　午前十時三十分より新館二十一番教室
●記念パーティ　正午より本館前（雨天の場合は当日掲示）

〈催しもの〉

●喜納昌吉とチャンプルーズによる演奏　パーティ終了後、
●一九二〇年代ヨーロッパのポスター展（奈良本辰也氏所蔵）　大学祭期間中
●モンゴルー人とゲルと動物たち―（映画）　大学祭期間中

◎在学生から

「……自由」「……自由」
伊波紀子（英語英文科二年）

精華へ入学して一年半。正直云って、未だに「精華とはどういう大学なのか」「精華へ来て何を学んだか」というようなことが、つかめていない。それは、二年というのは中途半端な期間であり、ぼやぼやしていられない、ということを意識していたにも拘らず、振り返ってみると、私自身がこの大学に対して、あまりに受け身であり過ぎたためだと思う。大学というのは、どこでもそうだと思うが特に精華は「自由」というカラーが強く、「何でもできる自由」と同時に、「何もしなくてもいい」自由があり、私は、ぼんやりしているうちにいつの間にか「何もしなくてもいい」方の自由を選択してしまっていた。そのことに気づいた今は、如何せん、もう卒業間近である。今までは、短大の宿命で、私と同じように、精華を考えず、理解し得ずに卒業していった先輩も、きっと多かったことだろうと思う。しかし、これからは四年制になったということで、精華をより深く理解し、精華の発展のために尽力する多くの学生が出てくると思う。そういう学生のもとで、これからの精華は、除々に伝統、カラーというものが確立し、大きく発展していくことだろう。

「十分の三」
辻　正勝（美術学部三年）

精華の歴史の十分の三を過ごしているわけだが、非常に感慨深い思い出が沢山残っている。入学当初は女子学生が多いのに嬉しい悲鳴をあげたり、コンパの連続で先輩との交流ができたり、毎日が楽しく過ごせた。そして教職員のすばらしさには驚いた。義務教育を終え高校に入り、そのときはわからなかったが先生に対し恐怖感があったし、先生とは形式的な会話しかなかったが、精華に来て色々な行事に積極的に参加しているうちに自然と先生方と交流ができ親身になって話を聞いてくれる先生もいて恐怖感もなくなり人間としてもかなり成長した。

そして、いつのまにか二年間が過ぎ、現在デザイン学科三回生になり、自分らは短大から大学の昇格時期の学生であり、先生方も満足なカリキュラムが組めないし、自分らもその甘えが出て何もしていない学生が多い。でも今後の自分は残りの学生生活を有意義に過ごし、精華の歴史に傷をつけないように努力したい。教職員の方も早く四年制大学として確立させ、より一層伸ばし続けて欲しい。

私の学生生活
武田邦子（美術科二年）

精華に入って早二年目。そろそろ就職をさがす時期で、学生生活も残念ながらあと少ししかない。

さまざまな希望で胸をときめかせて入学し、最初の頃は慣れるのに精一杯だった毎日の中で、私には部活動という唯一の楽しみがあったのだ。体育の中平先生が顧問で、とても話しやすくよい先生だし、バスケットを通じてよき先輩、よき友だちとめぐり合えて、本当にうれしく思っている。今年は合宿で、長野県の白馬の方に行ったし、東京には全国大会で出場した。

…といっても、今まで数々の試合をして、あまり良い結果ではなかったけれど、みんなでがんばり、よい思い出となるだろう。バスケットをするのもあと少し。それを思うとさみしいが、先輩や進級する友だち、そして後輩に、これからも楽しく、もっともっと盛り上げてがんばってもらいたいと期待している。

精華が開学して十年。長い道りだったことだろう。やっと実現した四年制。これからもますます発展してほしいと祈っている。

◎卒業生から

社会にでてから思うこと
荒賀（旧姓 青谷）依右子（英語英文科'70年卒業生）

大学も創立十周年、私達が卒業して約八年ということなのです。卒業以来、私にもいろいろな事がありました。渡英出来た事、その後英語を教える機会を得られた事、結婚、出産そして息子も二才十カ月となりました。色々な経験をする度に私は精華で受けた教育の数々を思い出すのです。そして常に本当に精華で学ぶ事が出来てよかったと心から思えるのです。

子供を持った今でさえ私に前向きに勉強する事を教えて下さったのは他でもない精華の先生方だと確信出来るのです。それは口に出してこうですよと言われたのではなく先生方の日々の学生との応対の中ににじみ出る研究熱心さを見ていたからではないでしょうか。

学生時代は勉強より他の活動がおもしろかったのですが卒業以来年を重ねるにつけてもっと勉強すればよかったと後悔したのです。その後私は自分で勉強する様になったのです。そしてこれからも少しづつでもいい自分の出来る範囲で続けられたらと思います。自分なりに勉強できる事はとても楽しい事だと思うのです。

我が母校
入江完（美術科'70年卒業）

はやいものだ。精華を卒業して、もう十年もたっている。

当時の岡本学長が私たちに「この大学を母校と言えるのは君たちだけで、母校になるこの精華を育てていくのも君たちだけなのです」と言われていたのを、昨日のことのように思い出す。

そして、あの頃は大学紛争の真最中で、当然の事のように、我校にもその波は押し寄せてきた。その中で、手さぐりで始まった新しい大学を創っていこうという動き、使命感に燃え、夢中だったあの頃は、果して青春の夢なのだろうか。

社会に出て、この日常の生活の中で、あの頃の二年間の時の重さが、今でも自分を燃えさせるのに充分であるのに気づく時、やっぱり母校は精華だと思うのである。

今後の発展を祈る。

久しぶりの精華
服部美智代（英語英文科'75年卒業）

先日久しぶりに精華を訪ねた。私が卒業して、もう4年半たつ。庭が整備され、食堂には自動食券販売機が置かれている。美術科は4年制になり、英文科もホームルームのようにクラス編成されているという。まわりの景色も変わった。変わらないのは、教室のにおいと常に新しく大きく変わろうとする校風であろうか。

LL教室で、私と同じ年に卒業し今年、再び専攻科生として精華の門をくぐったという人に出会った。お互い名前は忘れていても、顔はなんとなく覚えているものである。なつかしさと共に、他の人たちもどうしているだろうという思いでいっぱいになった。いつか同窓会ができたならばと思う。

二年間というほんとうに短い期間に、精華で私はいろいろなものを得た。一生の友人と呼べる人とのめぐり逢い、自分から学ぶということの大切さは、社会に出た今も私の大きな支えとなっている。そして、それはこれからの私にとっても同じである。私も精華に負けないように、大きな人間に成長してゆきたいと思う。

「精華に望む！」
山倉研志（美術科専・'78年卒業）

大学の起源は、教師と学生のギルド的団体であったらしい。

精華も巨大大学を非難して「失なわれた大学教育を…」を旗印に少数学生主義でスタートし今年で十一年目に入った。喜ぶべきか、悲しむべきか、四年制大学にも承認され、いやおうなく巨大大学に近づきつつある。教育の理想論と経営上の問題は当り前の様に衝突して、今、大学当局の官僚化や、教育のあり方が問われ出した。新教育の二十一では、五、六名のまったく耳を貸さない学生相手に講義をして給料を貰う事を恥かしくも思わない教育者が存在し、教授会では、学生を十ぱ一からげにして、前期、後期、一年、二年単位でまじめに教育が話し合われる。教育はマンツーマンであるべきではなかったのか。当り前が当り前でない。何かが狂っているのでは…。

十年を迎えたこの転期に当局側は、全員で梶を握っている手を確かめ、大学発足当時に目を返して、進路に間違いはないか、十年間で失なったものは何か、失なったものに掛け替えのないものは無いだろうか。と、職員の終身雇用制度から問題にするぐらいの話し合いがもたれないと、どんな問題の糸ぐちも見つからないのではないか。管理された安定した椅子に座って責任の分担でリアリティーのかけた手で梶を握っている今、創立当時の様に「ユニークな大学」の声の下に、夢を現実にするべく集まった創立者達の魂に等しいオールマイティーな人格のディレクターの出現を今一度、大学の中に、学生の前に立たせる必要があるのではないか。"九十九人の健全な学生よりも、一人の道を失なった学生を…"が"約百人の健全な学生達…"と平気で叫ぶ状況になる前に……。

◎元教職員から

夏椿のこと
花房順子（元職員）

事務局の一隅で、開学の年から約六年の間、大学の成長を見つめて過した私の思い出も、今は数々の出来事が重なり合って一枚の油絵の様に一時代の記録となっています。その中でも図書館前の夏椿のことは鮮明な白さとして甦ります。

この木は、かつて盲目の学生水木さんが英文科を卒業後、就職先の大阪で交通事故のため亡くなられた悲しみを、ご両親が大学への感謝に替えて植えられたものでした。この時の悲しみと無念さは彼女の目となり足となって励ました学友をはじめ、前途を期待して送り出した大学にとってもどれ程深いものだったか知れません。

この花が初めて咲いた年に私は大学と別れることになりましたが、この花を見る度にありし日の水木さんを思い出すと共に、温かな人達の集りであった大学のことを懐しく思います。

この花は、校旗も校章も要らないとする精華にとって、はからずも、信頼とやさしさと自由の学風を物語る明らかな象徴ではないかと思うのです。

（夏椿は今春（新）五号館の近くに移植されました——編者注）

岩倉便り
小野　修（同志社大教授）

皆さんお元気ですか。わたしも元気です。四年前に同志社にかわりましたが、今も岩倉に住んでいて自転車で木野を通って大学に通っています。昔を思いだすとなつかしいですね。

岩倉は人口が増えたので、十年前とは様子がかわりました。それでも岩倉のよさはまだまだのこっています。

皆さんは、今も勉強をつづけていますか。試験やレポートで悩まされないと勉強が楽しいでしょう。わたしがお役に立つことがあればお便りをください。

今年の夏は少ししらべることがあってアイルランドを旅行しました。アイルランドの青年の一人が「おれたちは奴等のくさった言葉しか話せねえのがくやしい」といっていたのが印象的でした。ケルト語を日常に話す人はわずかで、多くは英語しか話せないのです。

わたしたちは日本語を大切にし、そして外国語をよく学びましょう。ではお元気で。どこかで会ったら、声をかけてくださいね。

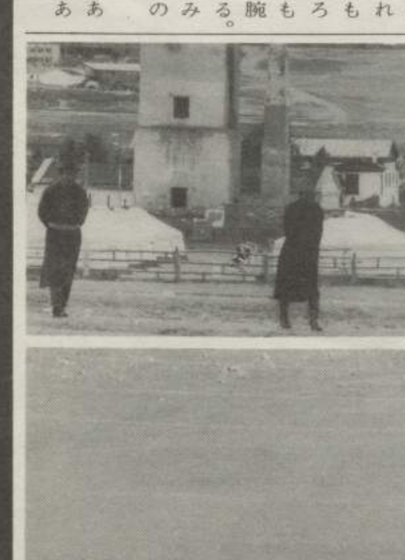
紺屋の白袴
新道弘之（元教員）

藍は土中に埋けた甕の中で細菌を何日もかけ醗酵させ藍草から色素を抽出環元する比類のない厄介で奥の深い染料である。生化学も微生物学も知らなかった遠い昔、民は如何にしてこの複雑な仕組をもってする藍染の方法を発見したのであろうか、不思議でならない。しかし分別知をもって藍甕の中を解明しようとすることは私には自然に対する冒瀆のように思える。

仕事場に神を祀るこの仕事はそれほど敬虔なものなのだ。長い歴史の中で我民族は自然に恵まれ自然と共に生き恒常の生活を営んできた。思えば現代社会のあがきともいえる公害も石油不足もノイローゼも人間が自然を科学をもってねじふせようとした事に対するお返しに他ならない。機械文明や化学文明に追いやられ風前の燈とも云えるこの染料に私は限りなく愛着を感じるのである。さて紺屋の白袴という諺は一般には他人の為ばかし忙しく手前の袴も染められぬ哀れな職人の事を云う。逆にもう一つ意があるのを御存知であろうか？白袴をはいて仕事をしても染料を飛びはねさせて汚さない腕のいい職人のことを云うのである。（注、藍は環元染料だからむやみに酸化させるのはヘタな染方なのだ）

—さて—私はどちらの職人であろうか、考えさせられる日々である。

愛染明王合掌



モンゴル紀行
佐藤正幸（職員）

期間は八月三一日から九月一四日。メンバーは高島寛・坪内成晃（美術学部教員）、永瀬俊紀・山本裕子（デザイン三年）、片岡千尋・中山洋子（卒業生）の他、田口俊夫（会社社長）、早瀬広美（民博事務局）、本多経子（上智大三年）の一〇名。

新潟からハバロフスクを経てイルクーツクで二泊。ここから汽車。なぜか発車間際まで駅に入れず、あやうく乗りそこねるところ。わが車輌内は、三人のモンゴル女性の車掌を含め、ポラロイドの効果もあって、和気あいあい。もっとも、夜、スフバートル駅で入国検査をうけた時は、はしゃぎすぎてひと問着。一時間半遅れで出発。旅券係が押印を忘れて写真に夢中だったのはおかしかった。三十数時間で首都ウランバートルに到着。帰路のウランバートルから北京までの列車をあわせると緯度にして約一〇度南下したことになり、めずらしいことのようだ。

ウランバートルの空は高く蒼い。街の中心部は広々として清潔。人口約四〇万。ウランバートルホテルはまずまずの建物。トイレットペーパーも、日本ほどやわらかくはないもののそれほど悪くない。ただ、ヤミドルの売買が公定の五〜一〇倍で行なわれている事実は、経済事情があまりよくないことを物語っている。また「平和橋団地」で撮影していて警察に連行されそうになった一件は社会主義国の政治状況の一端をうかがわせた。この首都を基点に、南部のゴビと中西部のホジルトにでかけるのが観光コース。バスが飛行機に横づけされる。客が乗りこむと、まるでタクシーでも運転するように飛びたつ。ただし、有視界飛行なので、気象条件が悪いと、すぐ遅延・飛行中止になる。観光客は一日を棒に振ることになる。

ゴビ。砂漠ではない。背の低い草と小石の土地。ドント（中の）ゴビの真只中にポツンと外国人用のゲル（テント）村。その横に砂塵をあげて着陸。あかるすぎて目が痛い。四方八方に、遠く近く、馬・羊・ラクダの群れがみえる。テントがわずかに散在。人影はまったく見えない。人口密度は平均一平方キロに一人、少ないところは一五平方キロに一人。モンゴル人には土地の所有観念はない。遠くトラックが砂塵を長く細くひきながら走る。北方に雪ののこるゴルブン・サイハン（三つの美しい山）を見るほかは、かすかに山なみは見えるものの、ほとんど地平線。あちこちに"逃げ水"がみられ、一部は蜃気楼になっている。夜、星が降るよう。北極星が鮮やか。空気は透明だ。ゲル村をでて国際音楽コンパ。ポーランド、ソ連・モンゴル人のパイロットたち。ここを基点にウムノ（南の）ゴビ、ゴルブン・サイハン山中にでかける。

ホジルト。モンゴル国民の保養地。外国人用のゲル村も隣接。川をはさんでなだらかな丘陵地には現地の人々の住居がたちならぶ。劇場・学校・協同組合・病院・温泉とひととおりそろっており、東欧諸国の客もけっこうきている。あおあおとした草原に白いゲル、馬や羊の群れ——われわれがモンゴルに対してもつイメージにピッタリの風景がここだ。女性や少年があざやかな手綱さばきで駆け抜けていく。ここから有名なカラコルム（ハラホリン）へはバスで二時間ほどだが、いまはラマ教寺院が残るのみである。

（大学祭期間中、この時に撮影したフイルムを上映します。乞来場）

礎となりし人々

「比叡山暮色」伊谷賢蔵

伊谷賢蔵先生を偲んで
福井　勇

京都精華短大美術科を創設、初代主任教授として、今日の基礎を築かれた私達の尊敬する伊谷賢蔵先生は、鳥取一中から京都高等工芸図案科を卒業され、関西美術院で本格的に洋画家としての研鑽を積まれた。当時、在野の進歩的な団体として大きな勢力をもった二科会に出品、会員となって活躍、戦後直ちに発足した行動美術協会の創立会員として、会の運営と、後輩の指導に尽されると共に、多くの傑作を発表された。

その画風は、先生の厳格な中に深い温情をもたれた、徹定したヒューマニストであった人柄を感じさせる。暖かい沈潜した赤系統の色彩、東洋画を思わせる力強い線、確かで豊かな画面構成等、伊谷芸術の特質は、強い感動を与えるものがある。作品は、文部省買上げの「阿蘇」をはじめ、府の資料館、市美術館、郷里の鳥取博物館等に先生の代表作が多数収蔵されている。

遺作展を機会に発刊された「伊谷賢蔵画集」は豪華で充実し、精華短大出版部の編集発行であり、発売と同時に限定千部を売り尽し純益金を基金にして、校外学舎として広く学生諸君に活用されている朽木の伊谷記念学舎が生れたのである。

伊谷先生は、かつて京都学芸大特修美術科創設の主任教授でもあり、精華大に於ては勿論、秀れた教育者として多くの人材の養成に当られると共に、京都の美術行政にも多くの責任ある役職をもたれ、立派な業績を残された。

図書館に掲げられた「比叡山」の油絵は、先生の最後の行動展作品であり、私達の指標でもある。

前芝確三を思う
岡本清一

政治学者、前芝確三さんが、病気であることを私は知っていた。彼と私は戦時中から、書いたものを通して互いに知り合い、戦後、彼が立命館大学に教師となって以来、二十数年、深い友情を交わした。病中の彼をこの大学に迎えたのは、彼に教職労働を期待したというよりは、その正確な判断を得たかったからであった。判断が狂えばいかなる人もその存在はマイナスとなる。前芝確三の判断は、大学運営において正しかった。しかしその彼も一年にして逝った。その人と風ぼうと言葉とは十年を経てまだ、私の胸を去らない。

柳島彦作先生のこと
長谷川　治清

柳島彦作先生は一九七一年四月四日、ちょうど木野駅の桜が満開の頃、七十八年の生涯を終えられ安らかに神のみもとへ旅立たれました。

先生はなくなられる直前に、"A Private Journal of an Old English Teacher"を執筆され、その結びにおいて先生の最後の教育実践の場であった精華について次のように述べられています。

Our College stands among beautiful green hills. It is all quiet here. In spring the cherry blossoms blooming among green pines will shed a flavoring beauty around and in the fall, varieties of pampas grasses you will see waving to and fro even philosophically. Indeed it is so calm and peaceful here on our campus, but once you join us you will come in contact with the burning life-force flaming up into a powerful torch of Life. It has been the greatest joy for me to keep burning even as part of the Life Torch that will spread all over Japan, and, through Japan, all over the world.

ここには、精華の美しい自然と私が学生の頃教室で良くお聞きした先生自身の教育についての信念が先生の人生観を通して表わされているように思われます。先生は真に「生きる力」を与えて下さる方でありました。最初は先生の英語のすばらしさに魅力を感じ近づくのですが、やがて英語をはるかに越えた人間としての先生の力強い生き方と、人の心に火をともし、真の意味でその人が成長・発展できる力をお与え下さる方であることを知るに至ります。

先生は人生の前半を中学・高校において、その後半を幾つかの大学において教えられています。そして、どこにおかれましても、先生は自分の教育信念を力強く貫かれました。

先生は晩年、日本の心を世界に紹介するために幾冊かの俳句の翻訳と自らの英詩を出版され、それらは広く世界に紹介されました。

英語教育を通し人をつくり、英語によって世界の平和に貢献することに命をかけられた先生の人生は、私たちに人間への強い信頼と深い愛を持って生きる勇気を教えられたことと確信致します。

◎父兄から

短大創立十周年 大学開学記念に際して
黒瀬哲一郎（教育後援会々長）

人生において子供の誕生、成長程嬉しいことはないと思います。生まれた子供に、どの様なことをしておいてやろうか、此の様なことをしておいたらばと、あれこれ喜びと期待とを持って、子を思う心は大変なことです。ある程度成長すれば七五三のお詣りと心をわずらわします。

それと同じ事が、私の教育後援会会長在任中に大学開学と云う形で、此の素晴しい喜びにめぐり会えたことは非常に幸運と云う他はないと思います。

短大創立十周年と大学の誕生と云う、此の慶事に際して、子供に対すると同様色々期待と喜びをもって、どの様にすれば為になるだろうか、この様なことを思いつつ先般の教育後援会役員会にて諸先生方の御意見、御希望をお伺いした次第です。

兼ねてより思っておりますことは、学校と云う所は本来、先人の遺した業績を学んだものの上に、更にそれを深く掘り下げ、新しく進めて行くと云う、非常に地味な業です。そこで将来、子供（学校）の為になり、ああ良くこの様なことをしておいて呉れたと云う様な地味であって、しかも今やっておかなくてはならない事柄をしておくのが、現在の吾々の務めではないかと思う次第です。

幸い深作学長より「組紐」「結び」と云う資料の収集のお話があり飛びついた訳です。と申しますのは、伝統工芸の中でも京都は宮廷文化と共に発達した特異さもあり、染色にも関連し、又結びによる意志の伝達とあらゆる分野に関連を持ち、芸術的価値もあり、その収集も早い内にやらなければならないと思います。

精華大学に一つの、ある分野における卓越した資料館を持つことはこの際非常に意義があることと思います。

皆様の御協力をお願い致します。

◎教職員から

組織に生命を
堀口牧子（教員）

草創期にはもっと生命があったように思う。それは矛盾がなかったということではない。おそらく、矛盾を克服して新たなものをうみだしてゆく共通の基盤があったということだ。一つの批判は非難としてではなく（そのように固定的に受けとられることもなく）自己をも他者をも鋭く貫いた。

組織が持続しようとする時、そこに属する人々の主観的な誠実さにもかかわらず、往々にして内実のとぼしい、あるいは醜悪なものにさえ転化するというのは、組織論や思想史をテーマにするものにとって、あるいは政治や社会や歴史をテーマにするものにとっても「客観的事実としては」了解しやすいことなのではないか。テーマとせずとも、この混沌の世の中で少しはまっとうな生き方をと模索するすべての人にとって、それは切実な課題であるはずだ。

組織に生命をよみがえらせ、気ずかぬうちに言葉の美しさとはうらはらに内実にとぼしいものに転化することをまぬがれようとすれば、自己の属する共同体、組織のあり様を、自己のあり様を通して問い返すことが必要ではないかと思う。

ともすれば安住しがちな自らへの自戒をこめて……。

コミュニケーションを
坪内成晃（教員）

いま、精華で十三冊目の一九八〇年度入学案内が印刷されてきている。ぼくは創立以来、何回目かの制作担当者だったのだが、いつも同じ風景や人物を写真に撮らなければならないので、新作に苦労する。もちろん、受験生は、はじめて手にするわけで、十年前と同じ内容であろうが変っていようが関係ないのであって、本質と異なるパンフレットは誇大広告となってしまう。だから、いわゆる創造的面白さに欠けているとしても、制作時期の精華を、ありのままに表現するだけである。

それは、学生との関わりでも同じことで、いままで、結果をつくることに性急すぎた。ソロバンの計算のように「ゴワサンになりまして」と卒業生を送り出し、「ネガイマシテは」と新入生を迎えていなかったか？ぼくはもちろん、学生にとっても、精華は結果でなしに過程にすぎない。

社会的に、デザインというものが変化、風化している現在、ぼくらの知識や技術の切り売りは通用しなく、絶えず新しいものを求めなければならない。が、人間どうしのコミュニケーションを、せいいっぱい、気長に、今まで通りやることがより重要だろう。

「楕球（ラグビーボール）を追う如く」
田所伴樹（職員）

この大学の十周年に先だって昨年十一月、ラグビー部創部十周年記念式が行なわれた。第一期生から第十期生に至るまで、百二十余名の"精華の人"が精華のはじめ、精華の昔、精華の今、そして精華のこれからを語り、酒をくみかわした。「亡き伊藤克己の冥福を祈ります。」と誰かがいったとき、皆の本当にみな悲しそうだった。アルバムから集めて来たグランドの練習風景の写真は、今とは全く違う精華の風景でパネルにして保存することにした。「楕球（ラグビーボール）」という記念誌も部員達の手で、徹夜で創りあげた。百二十余名、全てが主人公の本だった。この「楕球（ラグビーボール）」には一月、昇天された小野義夫先生にも寄稿していただいた。「楕球（ラグビーボール）」は先生がつけてくれたタイトルである。

「キック〳〵ボール〳〵高く蹴れェ」の歌を「雨々ふれ〳〵かあさんがァ」の節で生島吉造先生が教えてくれた。なんだかテレくさくて部員達は歌わなかった。「こんどいい詩と曲で部歌をつくったらいいな」と先生は笑っておられた。先生は、昨日（9月27日）昇天された。十年前のラグビーグランドは食堂前の三角の空地だった。精華ラグビー発祥の地だ。

「楕球を追う如く」。小野先生の文の中からこの文字を拾って、卒業後、石工修業の山本が、立派な石碑を造った。雨の降る静かな日曜日の朝、数名の部員達で、こっそりとこの石を「発祥の地」に据えた。ともすれば、気恥ずかしいこの創部十周年記念式を部員達は熱い握手でそれぞれの人生の再確認の日とした。

精華という建物や組織ではなく精華という「空間」に学生達がつくったこんなラグビー部が、僕は単純にすきである。"楕球（ラグビーボール）を追う如く"に話はころがってしまった。

'79年度入試のまとめ

●英語英文科

出願者は昨年を約一三〇名うわまわった。そのため一般入試の競争率は二倍強となった。

●美術学部

はじめての入学試験とあって、いろいろ懸念されたが、出願者は総数九二〇名をかぞえ、推薦入試で約三倍、一般入試で八・三倍の競争率を示した。

男女比は、出願段階では男子が約五〇％を占めたが、入学段階では三七％となり、短大当時より数％の増加にとどまった。

●美術学部三年次編入

本学の短大卒業見込者、専攻科生・卒業生を中心に各地の美術系短大生の出願が予想より多く、かなりの不合格者をださざるをえなかった。

'80年度入試の概要

●英語英文科

	試験日	入試科目
推薦入試	十二月二十一日(金)	基礎英語テスト
	十二月二十二日(土)	面接
一般入試	二月二十六日(火)	文章の理解と表現　英語
	二月二十七日(水)	面接

●美術学部

	試験日	入試科目
推薦入試	十二月十八日(火)	描写表現（鉛筆デッサン）　色彩表現（イメージ表現）
	十二月十九日(水)	面接
一般入試	二月二十三日(土)	文章の理解と表現　英語
	二月二十四日(日)	描写表現（鉛筆デッサン）　色彩表現（イメージ表現）
	二月二十五日(月)	面接

●美術学部三年次編入学　三月八日(土)作品審査・面接

《編集後記》

学内に記念準備委員会が学生を含めて発足し、会合を重ねた。記念祭の持ち方、内容について多くの意見がだされた。中でも学生からの、卒業生が大いに参加できるものにしたいという意見はうれしかった。大学が、在学生は勿論のこと卒業生及び父兄に直接呼びかけて集り（十一月三日）を持つということははじめてのことである。当日は、学内のあちこちでなつかしい顔ぶれによる歓談の輪が見られることだろう。

精華の十年を語る場合、人それぞれによってちがう。しかし忘れてならないことのひとつにこの十年間に学生を含めて物故された方たちのことであろう。ここでは比較的初期に物故された方について語ってもらった。直接教えをこうた人にとっては感慨も新たであろう。

「木野通信」発行にあたって、たくさんの方に書いてもらいたかった。紙面の都合で断念せざるを得なく残念に思う。

時間的余裕がないところに原稿依頼に応じてくださった方に感謝します。

記念祭を祝って

木野祭によせて'79年度

記念祭学生実行委員会

年中正月のような木野の里にも秋が訪れ、恒例木野祭を目前に、学生達もはりきっている様子。ここ三年、春の五月祭、夏の朽木祭、秋の木野祭と精華三大祭も定着してきている。今年は、精華開学十周年、美術学部の四年制開学という記念すべき年でもあるので、これを良い機会に、今まで交わりのなかった卒業生の皆様とも交流出来れば、と、在学生だけでなく木野祭に来て下さる人みんなに楽しんでもらえる様な企画を練っております。

十一月三日、記念式典の終了後、今、全国で話題騒然、沖縄から、喜納昌吉とチャンプルーズをむかえ、その演奏を皆で楽しみたいと思います。演奏終了後、喜納さんをかこんで座談会のようなこともしてみたいと思っています。

木野祭恒例となりました共同制作の展示も、今年はあとに残るものを作ろうと、意欲満々。今年開講の陶芸クラスでも何やら面白い企画が進行中であります。

とにかく、十一月、木野の里へ足を運んでみて下さい。三階建になった本館、昨年度完成した五号館を見て、すっかりイメージチェンジした外観に、昔ながらの学生がたむろする精華をその目で確かめて下さい。

モニュメント設立に関して

加藤正寛（美術学部三年）

〈設計者〉
ウラジミール・タトリン（一八八五～一九五三）
〈名称〉
公称、第三インターナショナル記念塔、自称（精華大学）十周年記念祭モニュメント
〈規模〉
底面積四・七㎡、高さ（台座を含め）三・一m
〈目的〉
精華短大創立十周年、同じく四年制設立を記念し、短大時代を通じて存在した様々な諸先輩方の建設的行動の全てを肯定する立場から、後進に対する積極的アプローチ、また我々自身の美術科学生としての自覚、更に一人のクリエーターであるための各自の自己形成を目的とする。
〈紹介及び宣伝〉
第三インターナショナル記念塔は、レーニンがモスクワに設立するべくタトリンに依頼したが、結局実現しなかったという曰くつきの代物です。実物は高さ400m、内部にある大小四つのビルは、下から大きい順に、第一のビルは一年に一回、第二は一月に一回、第三は一週間に一回、第四は一日に一回それぞれ回転するといった大変な建築物で、恐らくその頃のソヴィエトの科学力、経済力では実現不可能であったものと予測されます。

タトリンは、最初画家として出発しましたが、後にソヴィエト構成主義の中心的人物として有名で、またその独自な思考の軌跡が、現在の美術状況にとって彼を見逃すことの出来ない存在とさせました。一貫して作品を『再現的なもの、外部からそれを庶断し、特定の芸術作品として私的、理念的なものとしてしまう「粋」を取り外し、芸術のリアリティと生活のリアリティの分離を否定する』ものとする姿勢を崩さず、『現実空間に現実の物体を』という主張を「コーナーレリーフ」という一連の作品によって実現させ、その発展として彫刻も、単一素材（大理石、ブロンズ等）で物の形を型どるのではなく素材をそのものとして使用し、言葉のようにそれぞれの単位に抽象的な関係を持たせ、彫刻を自立的な形式とすることを考えました。

その頃、例の依頼によって、その昔人々が天に挑戦するために建てたというバベルの塔に想を得て制作したのがこの記念塔で、生命を吹きこまれなかったガラテアの像のように、ある種のロマンを持って建築家はもとより、彫刻家にも語られる存在となっています。現在これについて残されているのは彼の数枚のデッサンと、実際に彼が制作したミニチュアのほんの何枚かの写真があるだけですが、このガラテアに生命を吹きこもうとする試みは、ミニチュア制作として既にストックホルムとパリ（ポンピドーセンター）で行われてきました。本校にこれが出現した暁には、日本ではもちろん始めてのことですし、学生が建てたという例は、世界初のことになります。乞う御期待……

『』内は中原教授の論文「世界の関係像について」からの引用であることをお断わりしておきます。

モニュメント完成図

喜納昌吉とチャンプルーズ From 沖縄

棟真奈美（美術学部三年）

これまでに、国内・国外の沢山のミュージシャンと出逢ったが、特に印象に残ったのは、南の即ちトロピカルな香りのする人たちである。ジミー・クリフ、ボブ・マーリィー、そして沖縄の喜納昌吉は、ちっぽけな列島で肥大化の限りを彷徨ってきた僕ら〝日本人〟のセカセカした忙しさに驚き、卒直に僕たちの〝文明の毒〟に汚れた部分を指摘してくる。

今こそ、ダイナミックに、最早どうにもならない〝政治〟に対しその公害的文明に対し、それらと対等にパワーを持つ〝文化〟へ、音楽・映像・アートから遊びまでの開き直りが必要なのだと、南の島の熱っぽさと優雅さに立って、彼らは歌う。

喜納昌吉&チャンプルーズ、沖縄の自然破壊、文化の本土化の中から彼らは自分たちの足元を守れない、いらだちを歌い、と共に余りに悩むことの多すぎる時代に対し、踊りと歌の中から創造のエネルギーを引き出そうとしている。もっとシンプルに、もっと深く、もっとポジティヴにと。

その夜は、全てを忘れて阿波踊りも真青のチャンプルーズ・サウンドに溶け込み、そこに溢れ出すエネルギーを新しい時代の創造の為の、〝タネツケ〟に転化しようでは。

もう、政治のレベルには、何の幻想も持てない時代なのだから。

陶芸について

高須賀　仁（美術学部三年）

我々学生にとっても大学関係者にとっても四年制大学としての再出発はとても大きな意味がありました。新入生は、この大学が四大として設備が整いつつある状態で入学してきたので、過去のこの大学について何も知らないと思います。この記念祭を一つの区切りとして自分の大学の歴史を知り、前進するものとしてこの企画が出たのだと思います。

精華の祭といえば酒と音楽だけが前に出て、英文科、美術科の学生がやっている祭だという特色が出ることが少なかったようです。私も嫌いな方ではないのですが、それが祭の全てでは仕方がありません。それならば学生の作品を並べて展示すればいいかといえば、それもばかげていると思います。もっと別な方法で学生どうしの交流が必要です。

そこで我々は陶芸、つまり粘土で立体作品を、有志によって製作し、それを窯で焼くのではなく外で野焼をするという方法をとることにしました。むろん、できた物に意味があるのではなく、それを作り、焼き上げるという過程に意味があるのだと思います。

こうした共同作品を作る事によって色々な人々と知り合い、又難かしさを体験して、この小さな大学の学生みんなが、大きな声で、自分の名を言い、自分の考え方が言いあえるような、そんな第一歩に参加して下さい。

当日みんなで火を囲み、そこではじめて酒を飲み語り合いましょう。

野焼完成図

ヨーロッパ（一九二〇年代）の政治・労働運動ポスター展

奈良本辰也先生（歴史家）のご好意で、先生のコレクションより一九二〇年代のヨーロッパの政治・労働運動のポスターを展示いたします。第一次世界大戦そしてロシア革命が与えたヨーロッパ諸国の政治的激動を美術的にも価値のあるポスターを通してみることができます。